

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第 858 号 平成 27 年 1 月 5 日

## 年頭に思う（1）

明けましておめでとうございます。

皆さん、それぞれ良き新年をお迎えになられた事と思います。

昨年は、私の駄文にお付き合いいただきありがとうございました。読者の存在は、私にとり通信を書くエネルギーの源泉であり、改めて、読者の皆様に感謝申し上げます。

今年も、引き続きお付き合いの程宜しくお願い致します。

さて、今年は

- ・太平洋戦争敗戦から 70 年
- ・日韓国交正常化から 50 年
- ・世界貿易機関（WTO）発足から 20 年
- ・阪神淡路大震災から 20 年
- ・地下鉄サリン事件から 20 年
- ・京都議定書発効から 10 年

等、大変重要な節目の年に当たっています。

こうした事もあって、今年の各新聞元旦号の社説では、いずれも「太平洋戦争敗戦から 70 年」「日韓国交正常化から 50 年」といった節目の年を念頭に日本の針路について提言しています。

まず、各紙の社説の見出しを紹介しましょう。

- ・北海道新聞「参加と対話で未来を開く」
- ・朝日新聞「自虐や自尊を超えて」
- ・毎日新聞「脱・序列思考のすすめ」
- ・読売新聞「日本の針路を切り開く年に」
- ・日本経済新聞「戦後 70 年の統治のかたちづくりを」

各紙の社説は、論点や切り口は違っていても、戦後 70 年が経過する中、グローバル化という大きな波の中に日本はもとより世界の国々が巻き込まれているというだけでなく、中国の力が増大する中で、これまでのアメリカを中心とした世界秩序がきしみ始めているという点では、共通した認識に立っていると思います。

かつては「ジャパン・アズ・ナンバーワン」といわれ、世界第 2 位の経済大国だった日本は、今や経済力は中国に追い抜かれ、1000兆円もの借金を抱え、少子高齢化に喘いでいます。この老成化しつつある日本は、これからどこに向かって進

路を取るべきなのでしょうか。

北海道新聞の社説は、「日本は焼け跡から奇跡の高度成長を達成したが、バブル崩壊を経てデフレに陥り、少子高齢化という大きな岐路に立っている」と分析すると共に、これからの日本は「夢のような経済成長ではなく、負担を分かち合う時代。大事なことは、誰かに任せるのではなく、一人一人の参加と対話で未来を切り開くことではないか」と指摘しています。

そして、これから重要になって来るキーワードは「排除ではなく、住民の居場所をつくる包摂だろう」と述べているのですが、「包摂」という言葉に、私は新鮮な響きを感じます。

朝日新聞の社説は、日韓が国交を正常化して50年になるが、今そこに青空が広がっている訳ではなく、「歴史認識」という暗雲が厚みを増してきた感さえあると指摘しています。

また、当社説が「歴史を考える時の『自分』とは、ふつう日本人としての『自分』だ。しかし今、その『ふつう』が必ずしも『普通』ではすまない時代に入っている。グローバル時代だ。」と分析すると共に、グローバルな時代というのは、ヒトやモノ、カネ、情報が大量に国境を超えるだけではなく、「歴史認識」に関しても「国ごとの歴史（ナショナル・ヒストリー）」では間に合わず「グローバル・ヒストリー」という発想が必要だと述べている点は、重要だと思います。

「グローバル・ヒストリー」について、社説では「国や文化の枠組みを超えた人々の繋がりに注目しながら、歴史を世界全体の動きとしてとらえ、自国中心の各国史から解放する考え方」と説明しています。

確かに、日中、日韓の間に横たわっている問題は、日中韓がそれぞれ「ナショナル・ヒストリーから離れられないからだろう」と私も思いますし、当社説が提案しているように、新しい東アジアの歴史を創るためには、「自国の歴史を相対化し、グローバル・ヒストリーとして過去を振り返る」という作業が必要だと思います。ただ、学校教育の中で自国の歴史教育をしっかりと行ってこなかった我が国においては、「グローバル・ヒストリー」を議論する前にすべきことがあるような気がしてなりません。

毎日新聞の社説は、敗戦直後の日本人は、「貧しかったはずだが屈託がなく、戦争が終わり、平和が戻ってきた安堵感や前向きの明るさと希望が満ち溢れていたが、70年経った今は、得体のしれない不安といらだちが日本を覆っている」と述べると共に、「その不安やいらだちの背景には、隣国との長い不和と対立がある」事を多くの日本人が感じているのではないかと指摘しています。

当社説では、日本人の嫌中、嫌韓意識の要因はいくつかあるだろうが、その根本は、中国の大国化に見られるパラダイムシフト、つまり時代の大きな枠組みと秩序の変革に日本人が直面しているという事だと分析しています。

日本は、かつてはアジアではぬきんでた先進国であったものの、今や「アジアで1番」という序列意識が揺らいでおり、それが日本人が感じている不安と苛立ちの正体だという訳です。

当社説は、日本を追いかけるように成長してきた中国や韓国の隆盛は歴史の必然であり、後戻りできない東アジアの力関係の変化を受け止め、自らの立ち位置を見つめ直す事が、戦後70年を迎える日本の課題だと、指摘しています。

誰でも、自分の地位が脅かされそうになれば不愉快だし、不安感にさいなまされると思いますが、現実を直視し、いたずらに序列思考にとらわれて内向きの思考に陥ってしまう事は避けなければならないというのは確かだと思います。今、中国や韓国は、かつての日本のように序列意識の囚われ人のように感じます。東アジアの安定と平和のためには、日本だけではなく中国にも韓国にも序列意識からの脱却が求められるのだと思います。

当社説は、これからの日本の役割について、優越主義によるアジア観を排し、中国や韓国と共生できる地域の未来を考えながら、東アジアの和解と連帯に率先して取り組むべきだと提案しています。

世界の平和と安定こそ、日本の平和と安定の源泉であることはいうまでもありません。過去を忘れず過去を土台にしなから、平和で安定した東アジアを形成していくためにも、序列意識からの脱却は必要だと、私も感じます。(塾頭：吉田 洋一)